

大坂湾警衛と国主大名

——江戸湾警衛からの移転について——

三 宅 智 志

はじめに

ペリー来航後、江戸湾には細川斉護（熊本）、毛利慶親（萩）、立花鑑寛（柳川）、池田慶政（岡山）、池田慶徳（鳥取）の五家が家門・譜代からなる御固四家による警衛体制に付け加えられた。この内細川斉護を除く四家は、安政五年（一八五八）六月、通商条約調印後に大坂湾警衛へと移転した。

この移転に関して論究したのが針谷武志氏である。^①針谷氏は嘉永六年（一八五三）の江戸湾警衛は、品川台場に家門・譜代を集中させ相模・房総に国持外様を配置した構造を有し、安政五年も同様の構造で京都に家門・譜代を集中させたと明らかにし、幕藩秩序の特徴をもった配置と位置づけられた。そしてこの配置転換には朝廷の希望や京都防備に連動した大坂の国防的位置の上昇、大名役務体系の飽和状態などの要件があったとしている。

この針谷氏の論考の延長に後藤敦史氏の研究がある。^②後藤氏は針谷氏の「誰が朝廷を守るのか」という命題について論じ、江戸の老中と京都の所司代を基本ラインとする徳川と朝廷の議論を中心に検討された。特に幕府は京都警衛を名目に朝廷権威を利用する大名が出現することを恐れていたという。そして大坂湾警衛は京都警衛に繋がるものとして重視されたが、天皇の安心を得られれば大坂湾防備の強化の必要性はないとして、大坂湾警衛を京都警

衛の延長としてとらえられている。

針谷氏の江戸湾警衛と京都・大坂湾警衛における大名配置の構図の一致については全く同感である。稚拙ながら天保期の江戸城普請において、大名上納金からみる本丸・西丸普請の諸大名の担当箇所でも將軍の私的な空間の奥向普請では家門・譜代を中心に集め、公的な空間となる表向普請ではその儀礼空間を必要とする外様国持大名を中心に上納金を得ていた。^③この構図の延長上に江戸湾警衛や大坂湾警衛の大名配置があると考えている。

しかし両氏の論考には大坂という視点が欠如している。近世は徳川家の中央集権国家ではなく、諸侯や朝廷、神社勢力が乱立する地方分権の状態であり、また一般に幕府とよばれる機構も狭義には將軍、もしくは江戸にいる老中以下の幕吏で構成される範囲であり、遠国支配機構は幕府の範疇には含まれない場合がある。そして徳川家の内部でも江戸には江戸の決定機構があり、京都には京都、大坂には大坂の決定機構が存在している。

このことは近世上方における支配機構に関する研究をしている小倉宗氏が言及しており、江戸と大坂、京都における決定機関には同一の構造があると説明されている。^④すなわち江戸は老中の配下に三奉行・評定所があり、それと同様に大坂には大坂城代―大坂町奉行というラインがあり、京都には京都所司代―京都町奉行というラインが存在しており、大坂・京都の町奉行を「上方の評定所」と位置づけられている。つまり江戸とは別に、大坂は大坂、京都は京都で一定の裁量権を有していたのである。さらに本稿で使用する「常陸土浦土屋家文書」を用いた研究を菅良樹氏が行っている。^⑤菅氏は城代を頂点として大坂には西国支配に関する政策立案の権限や幕府への決定事項に同意が求められるなど幕府支配機構に対する一定の自立性が存在したことを解明し、上方支配は城代と所司代の二元支配の特徴をもち、これを基調としてつつ江戸も含めた多元的な上方支配機構を析出されている。

それは嘉永七年（一八五四）に川村就修が大坂町奉行に就任した際に渡された下知状からも明らかである。^⑥すなわちその第八条「摂州河州泉州播州万事仕置之儀町奉行可申付之和泉国堺奉行取斗来候儀者堺奉行可申付事」、第

十二条「西国筋船御用之節差当儀ニおゐてハ不被 仰出以前ニも相談之上近国江申触遅々無之様ニ可致沙汰相延不苦時者致言上御下知を可相待事」、とあるように、大坂町奉行の管轄は摂津・河内・和泉・播磨の四カ国であり、緊急の「船御用」などは江戸への伺いは必要はなく、現場の判断で決定してよいことなどが申し渡されている。後述するが、京都所司代の管轄と大坂城代の管轄は異なり、京都所司代は山城・大和・近江・丹波・丹後・若狭の六ヶ国と考えられる。

本稿では以上のような前提に基づき、安政五年の警衛大名の配置替えに關しての再検討を行うものである。まずその過程を明らかにした上で何を意図していたのかを考察し、さらにこの警衛大名の配置替えが幕末政治史の中どのように位置づけられるかに言及していきたい。

そこで注目するのが、嘉永五年（一八五二）から安政四年（一八五七）の間大坂町奉行であつた佐々木顯発である。^⑦ 佐々木は弘化・嘉永年間勘定吟味役海防掛として阿部正弘の下で種々の海防評議に加わっており、内閣文庫に残されている「御備場御用留」や「近海御備向見分御用留」などの史料を編集した本人である。また佐々木は川路聖謨にその才能を見いだされ、川路が奈良奉行から大坂町奉行に転役する際、川路の足かけ六年に及ぶ施政を継承させるため後任人事にすえた人物である。^⑧ その後も嘉永四年（一八五一）に川路が大坂町奉行から転任する時その跡役に佐々木を推し、また安政五年に勘定奉行から西丸留守居に異動となる際の川路の跡役も佐々木である。この佐々木の大坂町奉行としての動向に着目していこう。

第一章 ペリー来航後の上方警衛問題

ペリー来航後の嘉永六年十一月、江戸湾警衛は江戸城（將軍）周辺に家門・譜代、外縁部の江戸湾に国主大名を配置された。それとほぼ時を同じくして上方でも異国船渡来への警戒が強まっていた。嘉永七年一月十二日、京

都所司代脇坂安宅から京都町奉行岡部豊常・浅野長祚へ「禁裏 御所方」の守護について、京都火消しの延長で達しが出ている。^⑨前年末の十二月に脇坂が江戸へ京都警衛について、元来担当するはずの井伊家が江戸表の警衛に出ているための不安を漏らしており、^⑩その上での達しである。これにより京都警衛の整備が進んでいく。

警衛すべき範囲として京都表と京都近海を含めているが、この段階で京都近海は日本海側を指していた。すなわち一月二十一日の脇坂の老中への上申書の中に「外寇ニ至り候而者、海防者勿論、万一及上陸候ハ、京地江不近寄様、退治不致候而者、御守衛ニ不相成候間（中略）若狭丹後丹波近江山城大和六ヶ国之面々并永井遠江守、在府者御暇被下置、在邑者参勤 御免^⑪」として、海陸の「御守衛」が行き届くように京都近隣六ヶ国の大名と永井直輝（高槻）は参勤御免として京都警衛に専任できるように申し出ている。つまり京都近海は若狭・丹後の海岸であり、大坂湾を指している訳ではなかった。ただし同書では「城摂之両都」という文言があり、京都と大坂を同列の「都」として認識している点を見落としてはいけない。京都天皇が存在する「都」として所司代が置かれ、大坂は諸国の蔵屋敷がある経済の「都」として大坂城代が置かれている。所司代が管轄する範囲は若狭・丹後・丹波・近江・山城・大和の六ヶ国に限られており、大坂城代と所司代の縦割りの関係をここに垣間見ることができよう。

二月になりペリーが和親条約締結のため再び浦賀に渡来すると京都・大坂での事態も一変する。二月十三日、武家伝奏から脇坂に対してペリーの再来航により畿内近国の海岸に対する不安があるため、警衛体制の再検討が依頼されている。^⑫それと時を一にして大坂城代土屋寅直から老中へ大坂湾警衛に関する次の問い合わせがなされている。^⑬

異国船防禦之儀追々被 仰出茂有之江戸表近海者不及申浦賀辺并房総其外御警衛之儀嚴重被 仰付候趣然処近來夷船追々諸国海辺江乗寄セ測量等いたし不敬之情態を顕し候ニ付而者

皇国一帯之海岸何れ之日孰れ之国々島々江乗寄如何様之不行ニ茂難斗摂津和泉播磨之儀者内海ニ而西海より者容易ニ乗入候儀有之間敷候得共紀州四国之間者南海より里数茂近く其上当表之儀者西国筋之咽喉ニ而諸国之廻

船幅湊いたし海内無類之要津富庶繁榮之都会ニ有之異国ニ而茂定而相辨居別而不意ニ乗入可申哉茂難測第一京都江茂程近く誠以不容易儀与心配無此上奉存候依之当所御手当筋之儀追々取調候得共先勤引送寄記等無之町奉行御代官等江茂相尋候処町奉行所ニ茂取寄候書物等者無之由ニ御座候得共此度申談取調当表非常之節守衛之儀ニ付心附候廉々見込之趣申上候書付差出申候御代官者去ル弘化二巳年九月竹垣三右衛門設案八三郎勤役中摂泉播御料所其外海岸防禦筋之儀取斗方伺書御勘定奉行江差出候帳面并画図扣有之尤其後何等之差図茂無之旨ニ御座候得共右之内此度猶又心附候箇所夫々相改差出申候然処當時之模様ニ而者如何様之儀出来可致茂難測土俗之人心茂不安万一夷舶内海江乗入候節者諸向^方御手当筋之儀俄ニ指図受度旨伺出候者必定ニ御座候及其節急速之儀者機変ニ応し取斗方及指図可申候得共兼而相定置不申候儀者差掛何様存候共実用ニ不相立徒ニ動揺仕候而已ニ而其筋行届申間敷哉与懸念仕候防禦被仰付候向々ニおゐても俄ニ混雜仕候而已ニ而者折角心配仕人数差出候共無詮儀ニ茂相成可申哉旁以右御代官共^方先年相伺置候通^近国^之諸大名兼而御沙汰被成置候向其外共各持場増人数いたし可差出旨被 仰出候様仕度奉存候右之内海辺領分多有之面々者持場箇所多ニ相成候得共東西三十里程之海灣一带与申ニ者無之処ニ肝要之処夫々相守其筋之模様ニ依而防方茂可有之当地両川口西北之方者尼崎西宮兵庫辺東南之方者住吉堺岸和田紀州境之辺別而要領之地与奉存候堺奉行茂防禦筋心配仕候得共素より人少之儀迎茂一手ニ而者行届申間敷既先達而伺書進達仕候次第第二御座候且又先年御代官共^方申達次第人数差出候様被仰達置候向茂小高之面々者猶更僅斗之人数ニ而数十里之海岸差配応援行届申間敷哉ニ御座候間^近国^ニ而高有之面々藤堂和泉守松平時之助稻葉長門守等江別段防禦人数之儀被仰付候様仕度当地警衛之儀者則京都表之御守護ニ而肝要之場所誠以大切之儀ニ付右之段厚御評議被成下候様仕度奉存候將又当御城守護之儀者西国押之為被差置候御趣意与奉存候間容易ニ御城外江不罷出嚴重ニ守衛仕候者勿論之儀御座候処夷舶近海江乗入候節者早速町奉行御船手組之者等差出趣意相尋可成丈穩便ニ退帆為仕可申（後略）

土屋は大坂を「西国筋之咽喉」で「諸国之廻船輻湊」する「海内無類之要津・富庶繁榮之都会」として、国内第一の港であり経済の中心という認識を示している。そして弘化二年（一八四五）九月に代官より勘定奉行へ伺いを出しているが返答がないため再度の伺いである旨が注記され、異国船が内海へ乗り入れた際の指示を仰ぐ内容となっている。そのため近国での大身の大名、すなわち藤堂高猷（津）、柳沢保申（郡山）、稲葉正邦（淀）へ御固を命じることが必要であるが、「当地警衛之儀者則京都表之守護」となるため二重負担は解消させることを述べている。

この大坂からの上申書の中で注意すべきは「皇国」という言葉である。「皇都」は京都、もしくは御所を指すのであろうが、「皇国」をその延長で考えると文脈が通じるであろうか。「皇都」の延長で考えれば、「皇国」は御土居にかこまれた範圍か、漠然とした洛中洛外の範圍か、山城国あたりと考えられよう。しかしその範圍にすると「皇国一帯」からの文脈が通じなくなり、六十余州の範圍が妥当であると考えられる。ただしこれは大坂城代土屋の意見であるため、土屋は大坂湾警衛充実のために「皇都」「皇国」という言葉を利用している嫌いを看守できる。土屋はこの上申書の添書として大坂町奉行や代官の意見も同時に老中へ提出している。大坂町奉行石谷穆清、佐々木顯発意見書は以下の通りである。

大坂表万一非常之節御城警衛向其外諸事御城代差図を請取斗候心得二有之只今迄別段伺済等茂無之候処近年異国船度々東西江致渡来通信通商等を乞求候二付而者自然市中一体之氣請不穩諸品融通向手を縮勝二相成一身一家之覚悟而已仕候趣二相聞一体大坂表之儀者専金銀融通第一之場等二御座候此後追々手を引候様相成融通之道差塞米穀諸色入津相減候而者土地之衰弱者不及申江戸遠国迄之差支可相成者必定之儀且者海内之咽喉輻輳之土地柄彼国二而茂弁居可申哉誠二大坂表内海之儀者紀泉并阿淡州之間洋中より里数茂遠く既往古堺之津江夷人共舶を繋候先蹤茂有之候（中略）当所御船手之儀者往古川口奉行与相唱諸廻船改方者勿論平常冲手見廻方を茂相心得居候儀二付万一之節者速二出張可仕私共儀茂御城代差図次第組之者召連早速罷出応接等引請可申儀二御座候

得共元來町方支配重之勤向ニ而右体之場合市中混亂無之様火盜其外之取締方者勿論御武器類操出兵糧運送方等都而市中之人馬船方ニ可拘儀其餘万端之差配懸引茂可有之哉一体当表之儀者西国筋押之地ニ而自余之諸海岸杯与者更ニ諸違其上皇都程近之儀万一不都合之儀有之候而者以之外恐入候次第二而古今時勢茂不同候ニ付孰ニ茂土地一体之守衛ニて一際嚴重ニ被 仰付候方ニ可有之依之再応取調勘弁仕候処往古当表御陣之節藤堂和泉守先組高虎儀者御内命之次第茂有之候哉未発御前ニ出陣御先手を茂相勤其後元和度御城御普請之節者大坂并天満を守候由奉行所旧記茂有之和泉守方ニ限候而者当表ニ拝領屋敷茂所持罷在殊居城伊賀国上野名張川木津川淀川を下り一日一夜ニ到着相成候由ニ而当表ニ者別段之内縁茂有之候哉ニ相聞近国ニ而者大身之名家ニ茂有之候間諸役当等御差支之儀茂無御座候ハ、和泉守江大坂表一体之守衛相心得若異変之節者早々人数等差出可申旨兼而被仰渡候様仕度奉存候（後略）

大坂町奉行の意見としては、大坂は「金銀融通第一之場」であり、警衛の手を緩めれば諸廻船が入港せず大坂が不況となり、「江戸遠国」までも波及すると不安を覚えてゐる。さらには「海内之咽喉輻輳之土地柄」として大坂の国内における認識は土屋とほぼ同様のものを示している。また大坂は「西国筋押之地」として重要であり、そこに「皇都程近」いことを加味していることも見落としてはならない。さらに大坂湾警衛に関しては藤堂高猷（津）に担当させることを提案している。これは家祖高虎が大坂の天下普請の際に大坂・天満を守護した由緒に起因し、かつ近隣で大身の名家であるためと述べてゐる。藤堂高虎は江戸城の設計も担っており、また伊勢神宮を所領に含む津の領主であることを加味すれば、徳川家にとって外様でありながらも実質的には譜代同様の扱いをされていると推測できよう。

つまり土屋も佐々木・石谷も大坂は諸国の物産が集積されてくる経済の中心的な都市であり、かつ「皇都」へも近いという点で手厚い御備が必要という認識をしている。そのために近隣の大身の大名を動員することが必須であ

り、土屋は藤堂高猷（津）、柳沢保申（郡山）、稲葉正邦（淀）の三名、佐々木・石谷は藤堂高猷へ命じるように求めている。

この土屋の上申書と同月に脇坂から老中へも上申がなされている。¹⁴この中に含まれている伏見奉行の上申には近国の海岸を若狭・丹後と規定し、沿岸の大名と譜代大名での警衛体制の確立を説いている。そして天皇は奈良一乗院門跡へ遷幸することを提案している。伏見奉行の京都の近海は若狭・丹後であり、大坂湾に関しては大坂城代・大坂町奉行・堺奉行の管轄であり、そちらで決めるべきことと認識している。この伏見奉行の認識は、すなわち所司代と城代の管轄に明確な線引きがなされた縦割り行政となつていることの顕れである。

一方で京都町奉行浅野長祚は「皇都之御備御手厚ニ無御座候而者（中略）関東御威光ニも拘候儀」として、京都・若狭・丹後とともに「摂津海岸之義者、一円南北ニ連綿いたし、堺・大坂等緊要之御場所ニ有之」と大坂湾警衛の重要性を認識し、大坂・堺奉行との連携を図るべきだと主張している。¹⁵京都にいる幕吏の中で浅野は海防に関して非常に現実的な見解を示しているが、これは弘化年間に浦賀奉行として海防掛老中阿部正弘・牧野忠雅の下で海防評議に参加した経験によるものと考えられる。

さらに同年閏七月十八日、脇坂から老中へ京都表と伊勢神宮の警衛についての意見書が提出されている。¹⁷特に伊勢神宮は「御宗廟此上なく御太切」であり「甚以 叡慮御不安心」であるため、「御手当」が必要だということが述べられている。

嘉永七年上半期の段階ではペリー来航をうけての上方の海防方針に関する議論が活発化している。そこで最も重要視されているのは京都、天皇の警衛であり、天皇と関わりのある京都所司代が徳川方の代表として議論の中心に位置し、防禦すべき所は所司代の管轄である若狭湾・日本海側との認識が示されている。その関連で天皇家の宗廟である伊勢神宮の警衛に関しても何らかの手立てが必要との認識であるが、京都へ淀川を遡上することで容易に侵

入できる大坂湾に関しては、それほどの議論がされず、大坂城代の問い合わせであったり、京都町奉行の意見書の中で少し触れられるくらいであった。この大坂湾警衛が緊急課題として浮上するのは同年九月にプチャーチンが大坂に来航してからである。

第二章 プチャーチンの大坂来航と大坂湾警衛問題

嘉永七年九月十六日、紀伊国日高郡南塩屋崎沖にプチャーチンの船が姿を現した。プチャーチンは二日後の十八日には大坂安治川沖へ移動して、十月三日に退帆している。ただしプチャーチンは急に大坂に来航したわけではない。八月に箱館に渡来した折に「日本政府の貴官と治定の談判を遂んか為、此地より直様大坂に赴くべし」とし、また江戸での談判を希望するなら大坂で聞くと一方的な要望をつきつけ、大坂もしくは江戸でしか談判をしないと強硬な姿勢を見せている。⁽¹⁸⁾その上での大坂来航である。このプチャーチン渡来をうけ、九月二日、大坂は異国船応接の地ではないため、長崎・下田へ廻港するように申し諭すようにとの老中達しが土屋へ出されている。土屋は二六日付で老中からの達しに承知の旨を返答している。⁽¹⁹⁾大坂では内政に関する先例はあり、江戸へ伺いを立てる必要がないと考えられるが、外交に関しては無きに等しく、プチャーチンの来航は予測できたとしても対処できないため、江戸からの指示が必要となる。その江戸からの指示は大坂からいち早く退帆させることのみである。

二九日には、八月に箱館へ来航した際のプチャーチンの書翰の和訳を土屋に送っている。⁽²⁰⁾そして目付・通詞は派遣しないので「一日も早く其地退帆致し候様、精々骨折可取計旨」が達せられている。⁽²⁰⁾この達しにプチャーチンへの申請書が添えられて、十月三日にプチャーチンは大坂を去っている。ただし同四日付で再度下田廻港を命じ、その際に最低限度の食料は一回限りで渡していいとした老中達しが出ており、六日に江戸から急便で出され十三日に大坂天保山へ到着したようである。一方四日付で大坂ではプチャーチンが退帆した旨の報告書が出され、八日に江

戸に着いている。十月四日、江戸ではまだプチャーチンへの対応に関する指示を検討していたが、大坂ではプチャーチンが退帆した後の事後処理にかかっていた。江戸と大坂では当然ではあるがタイムラグが生じ、従四位下に叙され一定の自己裁量権を有する大坂城代といえども、大坂に先例のないことを取り扱うことは容易ではなく、江戸の老中からの指示が必要であった。しかしそれでは急場を凌ぐことすらできず、江戸からの指示が到着した頃には事態は異なった様相を呈しているのである。したがって先例がなくとも、大坂で速やかに対応できるような体制構築が緊急課題となってくる。

プチャーチンが退帆すると、土屋は大坂について京都へも近く、商業の中心であるために諸外国が目をつける場所であるが、長崎・下田・箱館以外へは異国船の渡来は禁止しており、「万一押而渡来致し碇舶等仕候者無余儀御打払可相成旨諸蛮江御達相成候者格別之 御仁恵茂相届 御国威茂相立」つとして、もし異国船が渡来したら打ち払うつもりであると述べている。⁽²²⁾土屋の論調は水戸斉昭に近いように感じられるが、管氏が指摘するように土屋と斉昭は従兄弟であり、⁽²³⁾所領も近いことなどから、土屋が斉昭の影響を受けていることが指定できよう。

このプチャーチン渡来を受けて大坂湾警衛の問題が顕在化していく。いつどこに渡来するかわからない異国船に対して、江戸からの指示なしで対応できるような体制づくりが必要となったためである。同年十月中に評定所一座による評議がなされ、老中へ上申がなされている。⁽²⁴⁾これは一月二二日の脇坂の上申に対して検討を加えたもので、京都警衛に主眼が置かれている。その中で「京地与大坂者唇齒之地勢ニ付、万事不都合候而者難相成処（中略）永続之所をも勘辨致し、可成丈簡易二而御警備相立候様」に所司代と城代がよく相談して警衛体制を整えることが述べられている。つまり評定所では京都警衛と大坂警衛は一体のものと認識しているのである。

評定所は大坂警衛に関する評議も重ねている。⁽²⁵⁾京都警衛と同時に議論されたこの評議は二月二六日に土屋から出された上申に基いて行われている。特に大坂町奉行が主張する藤堂高猷（津）の動員についてはその論旨の通り追

認した内容となっている。一方で柳沢保申（郡山）、稲葉正邦（淀）については京都でも動員要請があり所司代との相談が必要であるとされている。大坂に人手を割くと京都が手薄になり、逆に京都に人手を割くと大坂が手薄になるため、「同所御固之儀者、京都御警備ニ差響」くことが懸念される。しかし大坂警衛は「京都御守衛与牽連」するものであり、再度取り調べると結論付いている。

大坂から京都へは若狭湾から京都へ入るよりも容易である。大坂から京都は淀川を遡上して伏見から陸路京都というルートや西国街道から乙訓を通り入京するルートなどインフラは整備され、行程も難所があるわけではないため簡単に京都へ入ることができる。異国であつても大坂湾から京都までは、地理に詳しくなくともオランダからの情報をもつてすれば直結しているようなものであろう。京都警衛と大坂警衛が一体であるのは人的な部分と地理的な部分が相俟って重要課題となっているのである。

人的な問題である御固大名は大坂・京都の近隣大名は同一であるため、所司代と城代の取り合いとなることを江戸では懸念され、双方で厚く相談するように指示されており、最終的には評定所が再度評議した上で決定することになった。したがって十一月十八日、京都警衛に井伊直弼（彦根）、酒井忠義（小浜）、柳沢保申（郡山）⁽²⁶⁾を、また大坂湾警衛には紀伊慶福（和歌山）、蜂須賀斉裕（徳島）、松平慶憲（明石）を動員することをそれぞれ脇坂、土屋へ達せられている。特に大坂湾警衛の三家は自領の海岸に台場を築き防禦を手厚くすることを命じている。それと同時に対象の京都・大坂近隣の大名へも京都・大坂湾警衛への達しが老中からなされている。⁽²⁸⁾

大坂湾警衛については安政二年（一八五五）に勘定奉行石河政平、目付大久保忠寛、勘定吟味役立田正明らが大坂近海見分に派遣されることに併せて本格化していく。これにあわせて佐々木が一月十一日に意見書を土屋へ提出し、一旦朱書きで訂正され、二五日に再提出している。⁽²⁹⁾ 佐々木は石河や立田とは、勘定吟味役時代に江戸で海防掛として様々な議論を交わした周知の間柄であり、この派遣によって江戸での海防評議が大坂で再現される形となる。

その内容は安治川・木津川口に角稜堤の台場を築増すること、数が不足している大砲を新調し、大坂鉄砲方の坂本鉉之助の受け持ちとすること、兵庫・西宮に台場を築きそれぞれ松平慶憲（明石）、松平忠榮（尼崎）の受け持ちにすることが述べられている。これは添書と考えられ、本書はまた別に存在している。すなわち同二五日付で佐々木から次の意見書が提出されている。⁽³⁰⁾

当地御警衛向之儀得与勘弁仕取調候処当国海岸御固之向住吉西成両郡者渡辺備中守青木甲斐守持場之趣ニ而異
船渡来……………（本文ママ）之節人数差出方者当地御代官より申達候儀ニ御座候然ル所右海岸并当地両川口辺共遠浅

之海底ニ而異船間近く乗寄候儀者難相成川口辺者市中より三拾町余も相隔り惣体新田地ニ而農村漁家少々ツ、有之場所故格別御手重之御備ニ者及び中間敷哉ニ候得共西国筋之御押京都御間近之儀ニも有之不容易御場所柄之儀ニ付是迄之姿ニ而者如何ニも御手薄之儀ニ御座候間両川口初別紙絵図面ニ相認候程合ニ御台場築立被仰付御固者諸家之内ニ而も大家之向江不被仰付候而者行届申間敷哉与奉存候其向方一二手之人数平常当地江出張いたし罷在候ハ、急場も行届可申候得共左も無之通達之上国許より走附候儀ニ而者急速之場者届キ申間敷右様兼而出張之人数無之儀ニ候ハ、昨年魯西亜船渡来之節之通私共手限を以当地諸家蔵屋敷在合之人数為差出両川口其外海岸仮ニ為相固候方ニ可有之哉尤右節之通蔵屋敷向一統罷出候而者急速之場合混雜も仕候間凡左之手組ニ相定兼而夫々持場為心得諸事打合手筈整置候ハ、可然哉与奉存候

（中略、別表にて一覽提示）

右之通仮ニ為相固兼而御固被仰付候向到着次第模様見斗混雜不致様交代為仕可申候尤右仮御固之内ニも様子ニ寄人数少之姿ニも候ハ、申達次第相残候蔵屋敷向人数不残出張いたし候様兼而相達置候様可仕候（後略）

すなわち別表の通り御固大名として安治川口・木津川口その他各地の国主大名をはじめとして多くの大名を動員する構想となっている。まず大坂湾警衛については「西国筋之押」で「京都間近」のため「不容易御場所柄」で

〔別表〕両川口台場外警衛大名案

警衛場所	大名	領知	席次	石高
安治川口 北台場	細川斉護	熊本	大広間	54万石
	毛利慶親	萩	大広間	36.9万石
	井上正直	浜松	雁間	6万石
目印山台場	青木一咸	麻田	柳間	1万石
	黒田斉漣	福岡	大広間	52万石
	池田慶政	岡山	大広間	31.5万石
	松平定安	松江	大広間	18万石
	松平勝成	松山	溜間	15万石
	松平定猷	桑名	溜間	11万石
	松平勝道	今治	帝鑑間	3.5万石
木津川口 北台場	島津斉彬	鹿児島	大広間	77万石
	山内豊信	高知	大広間	24万石
	内藤正義	延岡	帝鑑間	7万石
木津川 南台場	浅野斉肃	広島	大広間	48万石
	小笠原忠微	小倉	帝鑑間	15万石
木津川口 村内	有馬慶頼	久留米	大広間	21万石
	鍋島斉正	佐賀	大広間	35.7万石
	鍋島直紀	蓮池	柳間	5.2万石
	鍋島直亮	小城	柳間	7.3万石
伝法川北 西島台場	佐竹義睦	秋田	大広間	20万石
南西島村	奥平昌服	中津	溜間	9.5万石
秀野新田村	松平頼胤	高松	溜間	12万石
南伝法村	大久保忠懿	小田原	帝鑑間	11万石
尻無川 福岡台場	伊達慶邦	仙台	大広間	62万石
	伊達宗城	宇和島	大広間	10万石
	池田慶徳	鳥取	大廊下	32.5万石

あり、御固大名は「大家之向」へ命じて、一・二手の軍備を常置しておくことが必要と述べている。その御固大名は国主大名とその分家、溜詰とそれに準ずる大名を中心に動員をかける構想になっており、北は仙台、南は鹿児島と六十余州全体から有力諸侯を召集する形となる。中には江戸湾警衛にあたっている細川・毛利・池田等や長崎警衛の黒田・鍋島の名前も入っている。もし実現したならば、日本の総力が大坂に結集する形になる。ただし佐々木は実現性がないことは理解した上での指名していると考えられる。すなわち動員できる可能性のある大名をすべて

挙げておいて、実際には石河らの大坂近海見分の折りにどこに誰を動員するか検討する素案にしたのであろう。

二月三日に佐々木・石谷の兩名からこの延長線上に位置づけられる意見書が土屋のもとへ提出された。まず一通目は安治川・木津川両川口警衛に関する取調書への答書として作成されたものである³¹。その中で御固大名は「高有之大名屯兩人」を要請しており、今回の近海見分の折りに評議の趣を申し上げれば「御沙汰」もあるだろうが、「国持御城譜代大名之内手堅方二而両三人程」に大坂湾警衛を命じて一定の人員を常駐させておくことが述べられている。「国持御城譜代大名」とは国主と城主、譜代の三種の大名のことであろう。特に問題視しているのはプチャチン来航の際に警衛にあたった人数の内訳である。出張した一七〇七人を一ヶ所一七〇八人に計十ヶ所に割り振った。その一七〇八人の内士分は三〇〇四〇人程で、あとは雑卒であったため「名有而無実」の警衛であると強調している。士分による警衛が何より大事であり、そのためには御固大名の動員が必須であろうことは明白である。

もう一通は佐々木個人の意見書である³²。佐々木は、大坂は「皇都程近」く紀伊家や蜂須賀家も異船の乗留方について困惑している模様があるために、早々の警衛体制の整備の必要性があると感じている。そして大坂湾への進入路として紀伊水道以外に、豊後水道から瀬戸内海を経由するルートも想定している。そして諸大名は「御一統之御徳沢ニ相浴し銘々大国ニ安居いたし候上ハ此時節柄 公儀御一手江相もたれ異船内海江乗込候を詮と見物いたし居候答者有之間敷筋」として、徳川一手の御備ではなく、諸大名が協力して沿岸警衛を行うことが肝要であり、紀伊水道・瀬戸内海沿岸の紀伊慶福（和歌山）、蜂須賀齊裕（徳島）、毛利慶親（萩）、毛利元周（長府）、細川斉護（熊本）、伊達宗城（宇和島）はじめの沿岸諸侯による警衛の充実が必要と訴えている。ただし佐々木は同時に「不遠内大坂者異船渡来之地与可相成哉」と大坂が開港場となることも想定に含んでいることは注目すべきである。

これらの佐々木の意見書は石河や大久保の大坂近海見分を契機に大坂奉行在任中に多く残っている。大坂湾警衛問題が急浮上する中で、勘定吟味役時代の海防掛の経験やその頃の同僚との大坂での議論があったことにより、

佐々木は江戸での知識・見聞を大坂で遺憾なく発揮していくのである。

二月中の佐々木の意見書を踏まえて九月十三日に土屋が老中へ大坂と堺における近海測量の結果を報告している⁽³³⁾。ここでは大坂町奉行や代官の上申を添えているが、石河や大久保、立田らが大坂近海見分を行った際に熟議を重ねているために近海測量の結果の絵図面を送付するという内容となっている。

この上申をうけて十月に川路聖謨から佐々木・久須美へ書状が到来する。川路が禁裏御所造営の任を受けて上京するに伴い、大坂城代・大坂町奉行との評議を行う目的の上申書である⁽³⁴⁾。ここで川路は大坂において台場建設と端艇を備えることを提言している。そして「台場御取建有之拾万石以上之大家兩人江御固被 仰付可然」だとして十萬石以上の大身の大名への御固を命じることが妥当であると考え、佐々木らの意見を追認する形をとっている。さらに「此度江戸表大地震等二而尚更莫太之御入費多端二及び候迎御差延難相成候間」と安政地震により多大な復興費がかかるが、大坂湾警衛の充実は先送りできる問題ではないと早急に取り組むべき課題とも述べている。台場建設は天保山普請の時と同様に臨時大濠いで川底浚いをした土砂を以て行うことを佐々木らは考えていたが、川路は「大濠之儀者先ツ御見合皆御入用を以御普請被 仰付」られるようにと、江戸から費用を捻出する積もりでいるようであった。これはあくまでも江戸、とりもなおさず將軍の体裁に関わる問題であり、將軍が費用を捻出して建設した台場で大坂湾を警衛することが、徳川が六十余州を警衛することに直結し武家の棟梁として徳川の体面が保たれるのであろう。

また大坂湾への異国船の進入を防ぐために紀州加田浦―友ヶ島間、友ヶ島―淡路由良湊間、淡路岩屋浦―明石間を固めて大坂湾を封鎖することを主張している。江戸湾における富津―観音崎間と同様に、内海進入の要所として注目している。そのように内海への入り口を固めた上での異国船の対応方法を次のように述べている。

向後異船乗通り候節乗留船差出来意を尋大坂ハ素⁶異国応接之地ニ無之物毎難相分旨能々申諭し条約相済候

国々者条約之通其余之外異者長崎江廻可申若難船漂流ニ候ハ、紀州和哥山阿州徳島等江船懸りいたし用便可致旨相諭食料薪水等ハ相応ニ相与江内海江不乗入様可斗旨紀伊殿并阿波守家来江被仰渡可然哉左候ハ、御趣意も貫通いたし乗留も出来可申追々船備等も相整候上者若聞入乗込候共帰帆之節心掛り有之候間自然平穩ニ可有之と奉存候

すなわち大坂は異国船渡来の地ではないため、異船が渡来した場合は、まず和親条約の締結の有無を確認し、結んでいる国は条約の通りに取り扱い、結んでいない国で漂流船でない場合は長崎への廻港を指示し、漂流船の場合は薪水食料を与え即刻退帆を命じるとしている。そして紀伊家・蜂須賀家が乗留ができなかった場合「藩屏之御趣意」が立たず、数日も滞在すれば、京都はじめ畿内への影響は計り知れず、下田・箱館への廻港を指示する形をとっている。また川路は大坂の内でも警衛する優先順位を次のようにつけている。

扱又乱妨之御備ニ候ハ、たしか成台場ニ無之候而者不相成上陸之御備を論し候時者摂泉播州浦々何れ之場所ニも嚴重之台場無之候而者相成不申其節ハ場広之事故是非御手薄ニ成行可申欵御手薄之台場所々ニ出来候とも御安心与申訳ニ無之候間先ツ必用之場所江炮台御取建之方ニ可有之必用之御場所与申候得者異人も心掛ケ御国ニ而茂大切之地者大坂ニ可有之大坂之内ニも両川口肝要ニ付先ツ右之場所江相当之御備相立其上ニ而外之場所江及し可然哉右之順^(朱序)者土地宜廻船相集候間大坂ニ引続兵庫ニ可有之其次者海面者遠浅ニ候得共奉行所有之候程之土地ニ付堺ニ可有之其次者西之宮とも可申哉乍去大坂ニも御防之大名を被 仰付其上右三ヶ所江も同様大名を被 仰付候様ニ者出来兼可申候間先ツ大坂而已之儀を申上候

すなわち最重要地は諸国の廻船が集う大坂であり、第二位は兵庫、さらに堺、西宮という順である。この四ヶ所へ「御防之大名」を配置するように述べている。この川路の意見を踏まえてさらに佐々木らの議論が深まり具体化していく。

十一月一日、佐々木は以下に示す大坂湾警衛に関する意見書を土屋に提出した。⁽³⁵⁾

大坂表近海御警衛者第一^{(朱)之儀}

京都近之儀誠ニ不容易儀与存候得共是迄御備向相立不申候間去寅二月中爰元御備嚴重被 仰付度之段老衆江及進達候処未御差図無之内魯西亜船渡来願意申立候得共御場所柄ニ付猶此地難取受存候間嚴重被取扱候様御自分方江申談愚意之趣江戸表江申上候処尤ニ御承知被成候段被仰下彼是致候内及退帆候其節急務之事故全一時之差略を以機変ニ応し夫々人数出張之儀相達候得共条理相立候儀ニ者無之尤紀伊殿御人数を始諸手速ニ致出張格別之氣精ニ而一旦事済相成候得共実以不容易儀ニ有之右之段（中略）内実藤堂和泉守松平時之助両家坏被 仰付候者可然と存候処伊勢ハ

神宮茂有之并ニ山田阿農津迎も海辺之儀松平時之助儀ハ 京都表御警衛等之御沙汰茂有之候哉ニ承且ハ急警為告知及進発候而者数日を歷候事故迎も急速之出張間ニ合兼可申防禦之儀者土着ニ而直様御用立候様ニ無之而者不相成候間国持大名之内手堅方ニ而両三人程茂当所警衛之儀被 仰付相応之人数爰元江差出置急場之節直様相固候様不被 仰付置候而者御備相立候儀とハ難心得此段幾重ニ茂申上候様可仕存候右者謹々可然哉名を指申上候様ニも相成間敷欵併松平大膳大夫細川越中守有馬中務大輔立花飛驒守坏之内関東之御用御引替被 仰付候共右様之内両三人茂不被 仰付置候而者決而御手当ハ相立申間敷儀ニ見込候間此旨茂相含可及進達と存候然処其辺之御沙汰有之迄之間御自分方手限を以諸家蔵屋敷有合之人数為差出両川口其外海岸仮ニ為相固可申哉之旨右者兼而被申間候通蔵屋敷詰之者ハ主人々々勝手方用向金銀融通蔵米国産物等取扱之為さし上せ置候もの共之儀去秋出張いたし候儀も何廉迷惑ニも存候半併火急の場合諸向出張之上之儀故不及兎角と心得罷出候半欵此後当所之諸向者一切不罷出蔵屋敷詰之者斗差出海岸警衛為致候段ハ相当之儀共不被存加勢援兵罷出候とハ誤違当地武役之面々者拱手罷在勝手用ニ而詰居候もの江武役之警衛申達候儀ハ可然筋とも不被存候（後略）

基本的な論調として川路の意見を踏襲していることは看取できる。その上で台場警衛の御固大名について、藤堂高猷や柳沢保申を動員できない以上の苦肉の策が生まれるのである。すなわち「名を指申上候様ニも相成間敷」ことであるが、国主大名の内毛利慶親、細川斉護、有馬頼徳、立花鑑寛らであり、それらの大名を「関東之御用御引替」て大坂湾へ移転させるといふのである。つまり一月二五日の佐々木の意見と川路からの意見を合わせて十一月のこの意見に集約したといえよう。

この佐々木の意見をうけて土屋方で一つの文書が作成されている。^{③6}この文書が江戸の老中へ提出されたかどうかは定かではないが、その内容を考慮すると江戸へ出す方向性を持つていたものと考えられる。

藤堂和泉守松平時之助両家杯被

仰付候者可然与存候処伊勢者 神宮茂有之并ニ山田阿野津迎も海辺之儀松平

時之助儀者

京都表御警衛等之御沙汰も有之候哉ニ承且者急警為告知及進発候而者数日を歴候事故迎も急速之

出張間ニ合兼可申防禦之儀者土着ニ而直様御用立候様ニ無之而者不相成候間国持^{御譜代}■大名之内手堅方ニ而両三人

程も当所警衛之儀被 仰付相応之人数爰元江差出置急場之節直様相固候様不被仰付置候而者御備相立候儀与者

難心得此段幾重ニ茂申上候様

一(貼紙)

可仕存候

左様無之候而者決而御間衛

然処其辺之御沙汰有之迄之間御自分方手限を以諸家蔵屋敷有合之人数為差出両川口其外海岸仮ニ為相固可申哉之旨(後略)

藤堂高猷や柳沢保申らを動員できないため国主大名を動員するという部分であるが、佐々木の文面では「国持大

名」となっていたが、「^{御譜代}国持■大名」と譜代大名も付与されている。さらに貼紙は次の文面の上に貼られている。

可仕存候右者誰々可然哉名を指申上候様ニも相成間敷併松平大膳大夫細川越中守有馬中務大輔立花飛驒守杯

之内関東之御用御引替被 仰付候共右様之内両三人茂不被 仰付置候而者決而御手当者相立申間敷儀二見込候
間此旨茂相含可及進達与存候

すなわち江戸へ進達する際に、江戸湾警衛にあたっている大名を大坂湾に移転させるということを提案すること
を憚り、さらには直接名指しするのはどうかという遠慮が佐々木自身にもあったように、そこには直接個人を指す
ことに対する遠慮が存在していたのであろう。一種の慣例化したなれ合いの政治体質が垣間見える事例である。こ
うして江戸へと進達されたであろうことが推測できる。

大坂町奉行が江戸の老中へ意見を述べるには大坂城代という仲介を経る必要があり、その仲介を経る段階で検閲
を受け、加筆・修正がなされて江戸へと進達される大坂町奉行―大坂城代―老中の正規ルートと、佐々木―川路―
阿部のように私的関係によるルートが存在していたのは想像に難くない。このような大坂での議論を受けて江戸で
種々の決定がなされていくのである。

第三章 大坂湾台場建築と御固大名

嘉永七年のプチヤーチン来航、安政二年の大坂湾警衛の議論を受けて安政三年（一八五六）には台場の建造へと
動いていく。

まず安政三年五月二三日に脇坂より、「世上追々静謐ニ茂相成、禁中ニ於て茂、御安慮被為在。諸家疲弊を被
為厭」⁽³⁷⁾ ているため、御固大名の一番手以外は京都から撤兵することが武家伝奏へ通達されている。そして七月十四
日に井伊家は一番手以外を引き上げ、小浜酒井家と柳沢家は当番制を敷いて京都警衛が緩和された。⁽³⁸⁾

京都で警衛体制が緩和されていく中で、大坂では台場建造が急がれた。七月十八日には老中から台場建築と西洋
式端艇建造の達しが下された。台場・端艇建造については大坂町奉行が担当し、くわしくは勘定奉行松平近直・石

河政平・川路聖謨、勘定吟味役立田正明、村垣範忠、目付岩瀬忠震・大久保忠寛と相談の上進めるように命じられている。また台場建造の費用は徳川方が捻出したいが、「近頃両川口之水利不宜」かつ「諸物価ニ差響市中一体之衰弊之基」にもなるため、臨時大濠いによって台場を建造することとなり、川路の案よりも大坂の町の実情に合わせた決定となっている。

八月二日には老中から大坂湾警衛に関する達しが脇坂に下っている。⁽⁴⁰⁾ここでは大坂は「京都御程近之大濠、皇国咽喉之要地」との認識を示している。「皇国」とは一体と再度疑問符をうつが、ここでは明らかに京都のことを指しているよう。嘉永七年段階での「皇国」は六十余州全体を示している可能性もあったが、安政三年のこの達しでは広くても山城国か洛中洛外の範囲、狭ければ洛中かもしくは禁裏御所のみを指して「皇国」と言っている。つまり「皇国」とは天皇の住む地域を指している。さて大坂湾の台場・端艇ができたならば、「高相応之諸侯江御預」けることが必要とされ、京都警衛が緩和された反面、大坂では御備充実が急がれていた。また紀伊友ヶ島と淡路由良湊までの紀伊水道は場広であるために要注意とされている。

したがって同日付で紀伊慶福（和歌山）、蜂須賀斉裕（徳島）に対して端艇二〇艘に大砲を据え付けて警衛にあたるべき旨の達し⁽⁴¹⁾が下された。紀伊家というには及ばないが、蜂須賀家は本来外様国持にあたる家格であるが、当主斉裕は十一代将軍家斉の実子であり、将軍家定の叔父にあたり、実質的に家門の格を有する大廊下詰の大名である。したがって土屋が訂正した「国持御譜代大名」に適う存在の二家へと警衛を命じているのである。偶然の一致かはたまた文化年間の斉裕の養子先選定の際にここまで見越して選んだのかは定かではないが、結果的に家門・譜代体制の警衛体制が大坂でも実現されていくのである。

そして大きな転機としてアメリカ総領事ハリスの下田着任がおとずれるのである。大坂で台場・端艇建造の折りにハリスの着任により大坂開港という問題が現実味を帯びていく。その上で土屋は九月二八日に大坂開港は断固忌

避すべきであるという内容の建白書を老中に提出する⁽⁴²⁾。その中で、土屋は和親条約締結後の列強の動向を非難し「清潔之 神州ニ候儀者普く存し罷在候儀殊更 東照宮様往々之処深 御配慮被遊唐国并阿蘭陀計者長崎ニ限交易御免被成置其他ハ嚴重ニ御制禁」と徳川家の神祖東照大権現の配慮によりいわゆる寛永鎖国令が出されたことや、「元来畿内之大湊諸家往来之要津ニ而仮初ニも外夷等ニ相窺せ候場所ニ無之者顯然」と異国船が大坂に姿を現すことと自体があり得ないと認識していること、さらには「皇都」が近く、もし開港ともなれば徳川家の「御失態之御儀」ともなると懸念している。そして「近年天災相重り諸国疲弊仕庶民安堵不仕候段乍恐 東照宮様 御神慮之程も難奉計恐懼至極」と安政地震により諸国が疲弊しており庶民が不安がっていることが「東照宮様 御神慮」に反する事態であるとの認識している。

大坂湾警衛は京都警衛と一体のものであり、天皇という存在が政治の表舞台へと登場しているが、それほど大きな存在とは感じられない。それは天皇はあくまでも徳川に守られている存在であるが故である。また徳川將軍はあくまでも「東照宮様 御神慮」⁽⁴³⁾を実行する主体である。その「東照宮様 御神慮」とは曾根原理氏が明らかにしている「衆生救済」であり、すなわち「庶民安堵」である。「庶民安堵」ができる政治を行うことが徳川家に課せられた神命であり、庶民が安心して暮らせる治世を実現することがとりもなおさず徳川家の安泰へと直結し、その延長上に天皇の安慮が存在するのである。逆にいえば諸国万民の不安を募る大坂開港は拒否すべきものであり、万民の不安は將軍の不安、天皇の不安へとつながっていくため、開港拒否、さらには最終手段としての打ち払いへと議論が発展していくのである。

十月になると台場・端艇建造に関する議論が大詰めを迎え、佐々木・久須美が松平近直、川路、大久保、立田、岩瀬と台場の模様替えについて打ち合わせている⁽⁴⁴⁾。台場の模様替えについては現場の判断に委ねられ、台場・端艇の仕様についても鮮明なものとなっている。しかし佐々木はこの後安政四年二月二四日小普請奉行へ転任し、大坂

の地を去ることになり、後任としてペリー来航時に浦賀奉行を勤めていた戸田氏栄が着任することになった。⁽⁴⁵⁾これは政策案作成のための種々の議論をするのは佐々木、実際に現場指揮をとる段階になると戸田とそれぞれの実績にあわせた人事と考えられる。

同四年四月二八日、木津川口へ松平頼胤（高松）を任命し、正四位上に昇らせ、安治川口は松平定安（松江）をあてて、少将に任じている。⁽⁴⁶⁾江戸での彦根井伊家、会津、川越、忍の松平家の御固四家体制と同様の家門・譜代体制で警衛にあたり、紀伊水道の紀伊家・蜂須賀家と徳川將軍家の縁戚大名で御固体制を敷いていることがわかる。

ハリスが出府し通商条約締結のための談判に関する情報が土屋の元に入ると、土屋は老中へ宛てて次のように上申を行っている。⁽⁴⁷⁾

此度下田在留之亜墨利加官吏国書持参、其御地参上之儀相願候ニ付、拝礼可被 仰付旨、右者御先蹤も有之、御許容相成候段者、無御余儀御事ニ奉存候間、今更申上様無御坐候儀ニ候得共、右国書之内如何様之儀申上候も難量、大坂表之儀者、諸夷兼而相望居候趣御座候間、新ニ開港之儀相願可申哉と推察仕候、勿論兼而条約御取組ニも相成候上之儀、容易ニ御差許無之儀と奉存候得共、夷人追々増長仕、種々御配慮之儀申上間敷共難申、当地之儀者、京都近之儀、殊ニ諸国要津御場所ニ付、万ニ開港御差許等ニも相成候而者、乍憚御尊敬之思召不相立、自分諸人敬服之心迄も薄く相成候趣ニ而者、御威令 御大札ニも預り可申候、夷人とも弥企増之念慮相募候上者、京地迄も罷上り度旨可申出哉、作用ニも相成候而ハ、尚更御名分にも拘わり可申儀者、深く奉恐察候、其上畿内委敷辨候様ニ而者、眼前御不為之御儀出来可仕も難計、何卒此上御永久万全之御良策御所置御座候様仕度奉存候、右之段差越候儀申上候様ニ而者、奉恐入候得共、当地者西海筋江御隔之御場所柄、誠ニ御大切之儀、若御評決相成候後、申上候而ハ、心底も不相済深心痛仕候、此段申上候、以上、

すなわち土屋はハリスが大坂開港を言い出すことを懸念しており、その理由として京都が近いこと、諸国廻船の

集まる要津であることを挙げ、もし開港すれば「御尊敬之思召不相立」と東照宮以来の寛永鎖国令に反し、さらには諸役人の敬服の心も薄くなり、「御威令 御大札」に関わる事態となる。また夷人が上京を望むことも予想され、そうなれば徳川家の「御名分」にも関わる問題として、江戸での「御良策御所置」があるように述べている。

そして安政五年に条約交渉が本格化すると大坂でも開港拒否の姿勢を固持するため、老中首座堀田正睦へ上申書を差し出している。土屋は其中で、大坂は「皇都御近辺之儀、殊ニ諸国輻湊之要津」と再三にわたり訴え、たとえ「御国法大变革之御沙汰被 仰出」ても、畿内の内海である大坂湾への進入は厳しく禁止にすべきであると主張している。寛永鎖国令の「御国法」を変えたとしても大坂湾への異国船進入に対して非常に過敏な反応を示しているのが理解できよう。また久須美は大坂開港について「万一 御免御坐候而者、帝都近之儀与申、人氣騒立可申、其上 御国内諸産物融通忽ニ差支候儀」として反対の意を表している。⁽⁴⁸⁾さらに大坂は江戸とは異なり大名屋敷がなく、大坂湾警衛は甚だ手薄である点も考慮に入れて大坂開港は見合わすべきとしている。ただし「御国法大变革」に対しては拒否をしておらず、むしろ止むを得ず受け入れるだろうという前提で、条約締結はしても開港地として大坂を外すことを提言している点は注目すべきである。

通商条約が安政五年六月十九日に締結されると、二日後の二一日に京都表と大坂湾の警衛に関しての達しが出された。⁽⁵⁰⁾すなわち京都警衛には松平頼胤（高松）、松平定猷（桑名）、松平定安（松江）、京都の臨時援兵に藤堂高猷（津）、大坂湾へは品川御殿山から池田慶徳（鳥取）、安房・上総から池田慶政（岡山）の両池田家と山内豊信（高知）の三名、兵庫警衛には相模から毛利慶親（萩）、堺警衛には上総富津から立花鑑寛（柳川）が命じられた。大坂・兵庫・堺警衛を命じられた大名はいずれも嘉永六年十一月に安房・上総・相模警衛を命じられた大名であり、その際には井伊家はじめ家門・譜代衆は江戸内海警衛となっている。江戸では江戸城付近を家門・譜代が押さえ、外海を国主大名で固める体制を敷いていたが、上方でも京都を江戸城、大坂湾を外海と置換すれば同様の構図が確

認できる。ただし嘉永六年に動員された五家の内、大坂へ移転されていないのは細川斉護（熊本）のみである。細川斉護の先代斉樹の正室は十一代將軍家斉の実妹紀姫で安政年間にはまだ存命であった。この紀姫が大奥を通じて口をきいたと考えると細川のみが江戸へ残ったことには合点がいくであろう。⁽⁵¹⁾

京都・大坂の警衛問題は一体の問題であり、同時に改革に取り組む必要があった。そのため大坂には勘定吟味役時代に海防掛を経験し、川路に認められた佐々木が存在し、江戸では佐々木と昵懇の仲である川路を含む海防掛が一定の力を有して、対外問題に取り組んだ結果である。すなわち大坂の佐々木、江戸の川路のラインで通商条約調印前後の大坂警衛体制を江戸湾警衛をモデルにしながら素地を築き上げていった。そして安政四年二月二四日に佐々木は大坂町奉行から役替えとなるが、約四年半の歳月をかけて大坂警衛体制構築の路線を築き上げた後に佐々木は役替えとなり、元浦賀奉行として外交に実績のある戸田氏栄が着任する。そうすれば通商条約調印というきっかけがあれば、いつでも江戸湾をモデルとした京都・大坂の警衛体制を実現できるのである。ただしこの体制が実効性を有していたかといえば、疑問が残り、安政五年八月十五日段階で一条忠香は細川斉護や池田慶政に対して「京師御備向御手薄」と家門・譜代で固める京都警衛体制に不安を漏らしていることから、形式だけの警衛体制であり、実備を有した大名が全国津々浦々には多く存在していないことを物語っている。⁽⁵²⁾

おわりに

大坂湾警衛は大坂城代―大坂町奉行ラインで基本計画を練り、そこで作成された案を江戸で追認・決定していき、台場・端艇の建造に取り組み、江戸湾警衛の四家の移転に至った。その議論の中心には川路の跡役として大坂町奉行に就任した佐々木顕発の存在があった。そして佐々木が小普請奉行へ異動となるまでの間に一定の素案が成立し、その延長線上に以上のような政策が位置するのである。ここからは現場のことは現場の判断で決定していく近世に

おける徳川政権の政策上の特徴を看取できる。

針谷氏や後藤氏は大坂湾警衛は京都警衛の延長線上に位置づけ、あくまでも天皇警固が最優先事項とされていた。これは江戸と京都との関係から見ればたしかにそうであるが、大坂城代や大坂町奉行の議論を看過した結論であることはいうまでもないであろう。所司代が管轄するのは朝廷・天皇であるが、城代が管轄するのは「西国筋之押」としての大坂城であり、「諸国之廻船輻湊いたし海内無類之要津富庶繁栄之都会」である大坂の町・蔵屋敷である。京都と大坂は非常に近接した場所ではあるが、所司代と城代ではその存在意義が異なっている。そのため大坂湾警衛に諸家が動員されるのは、それぞれの蔵屋敷の警備であり、それは各家の財政の守護に直結する。京都と大坂では警衛の目的が明らかに異なるのである。

江戸湾警衛は江戸城下をはじめ相模・房総を老中管轄のもとに体制を組み、相模・房総の現場の指揮は浦賀奉行がとっていた。同様に京都警衛は所司代が管轄し、現場指揮は京都町奉行、大坂湾警衛は大坂城代管轄のもとに大坂町奉行が現場を指揮していく。江戸はすべて老中管轄のもとの一元的な体制であるが、上方においては菅氏の述べる通り、所司代と城代の二元的な警衛体制を敷いていたのであり、所司代はもちろん天皇を強く意識するが、大坂では天皇に対する意識は強くなく、むしろ別のものに意識が向いていた。すなわち大坂は、將軍の膝元である江戸や天皇の存在する京都と同列の天下の台所、商都大坂なのである。近世における日本経済の中心なのである。大坂湾警衛はこの点を非常に強く意識しているのである。大坂堂島の米会所は現在の東証にあたり、ここでの取り引きに支障ができれば日本経済の悪化を招くことになる。したがって大坂湾警衛とは將軍を守護する江戸湾警衛や天皇を守護する京都警衛とは異なった日本経済の警衛という意味があった。

この大坂湾警衛に緊急性が出るのは、嘉永七年一月のペリー再来航時に京都警衛問題が浮上したことよりも遅れ、同年九月に実際に大坂湾へプチャーチンが来航したことにより顕在化し、安政二年における幕吏の大坂近海見分や

川路の禁裏造宮のための上京に伴い議論が活発化し、そこでできた素案を元に江戸で議論を重ねられた。安政三年のハリスの下田着任に伴い大坂開港が現実問題となっていくと大坂湾警衛が実行に移されていき、安政五年通商条約調印に伴い、江戸湾警衛を担っていた萩毛利家、柳川立花家、鳥取・岡山両池田家が大坂湾警衛に移転された。これにより針谷氏も明らかにされているように京都は家門・譜代、大坂湾は国持外様という江戸湾における構図が大坂においても再現されるのである。大坂湾警衛に関する素案作成や議論・評議の段階では江戸で海防掛を経験した実務官僚である大坂町奉行佐々木顕発がその中心に存在した。そして安政四年以降その案を実行していく段階になると弘化・嘉永年間に浦賀奉行を勤め、ビッドルやマリナー号、ペリー艦隊の応接実績のある戸田氏栄が現場の指揮者として赴任するのである。

ただし留意しておきたいのは朝廷・天皇を警固するのはあくまでも徳川家であることである。京都警衛を命じられているのは何れも越前家や溜詰の家門・譜代大名であり、外様である国主大名は大坂・兵庫・堺警衛へと回されている。大坂開港が現実味を帯びる中で最悪の事態を想定すれば、禁裏御所周辺を夷人が徘徊することである。その可能性は断固として排除すべき問題であり、さらには天皇の近辺を警護するには徳川将軍家の信のおける大名にしか委ねられない。とすれば必然的に家門である越前家や譜代でも特に將軍側近である溜詰の大名に限られてしまう。そして外様・国主大名は京都から遠ざけられた大坂湾警衛となっているのである。

しかし、皮肉にもこの京都・大坂警衛問題を議論する内に天皇という存在が次第に政治の表舞台へと登場していった。江戸湾警衛や和親条約締結時には浮上してこなかったが、京都と大坂の問題が膨らむと同時に天皇という存在も肥大化したのである。そして將軍継嗣問題と複合的に絡み合っ、幕末における一つの大きな存在へと成長していった。

大坂湾警衛問題でもう一点留意すべきは大坂城代土屋寅直が氣にかけていた「東照宮様 御神慮」の存在である。

「東照宮様 御神慮」とは「衆生救済」という仏教理念であり、そこには「庶民安堵」という人民統治の必要性、そこから得られる民衆の支持が徳川家の安泰と將軍權威に直結し、その將軍が天皇を警固すれば天皇も安心でき政治の表舞台に登場することはなかった。土屋がその「東照宮様 御神慮」を気にしていたことを考えれば、近世初期から徳川家を貫く一本の柱がそこに存在したものと理解できる。しかしこの「東照宮様 御神慮」も將軍継嗣問題によってもろくも崩れ去り、その結果天皇を包括していた將軍權威がうすれ、諸大名が天皇の下に集結していく時代へと変化していくのである。

註

- (1) 針谷武志「安政―文久期の京都・大坂湾警衛問題について」(明治維新史学会編『明治維新と西洋国際社会』吉川弘文館、一九九九年)。
- (2) 後藤敦史「楠葉台場以前の大坂湾防備―安政期を中心に―」『ヒストリア』第二一七号(二〇〇九年一〇月)。
- (3) 拙稿「天保期江戸城普請における大名御手伝・上納金について」『鷹陵史学』第三五号(二〇〇九年九月)。
- (4) 小倉宗『江戸幕府上方支配構造の研究』(塙書房、二〇一一年)、一九二―一九四頁。
- (5) 菅良樹「嘉永・安政期の大坂城代―常陸国土浦藩土屋寅直の大坂・兵庫開港問題への対応を中心に―」『日本研究』第四三集(二〇一一年三月)。
- (6) 「御黒印下知状之留」(国立公文書館内閣文庫所蔵)。
- (7) 佐々木は文化三年(一八〇六)に元代官元締手代河野周助の子として生まれ、後に御徒佐々木喜四郎の養子となった。文政九年(一八二六)二一歳の時に御徒抱入りとなり、文政十三年(一八三〇)五月に支配勘定出役となり、天保十三年(一八四二)四月六日、三七歳で勘定組頭へ昇り「永々御目見以上」と申し渡され、翌十四年(一八四三)閏九月二十日、阿部正弘が老中になるとほぼ同時に勘定吟味役に転役している。同年には朝鮮人來聘御用掛、天保十五年(一八四四)本丸が焼失した折には本丸普請御用掛を勤めその功績から留守居番次席となった。嘉永三年(一八五〇)三月六日より江戸近海見分御用に随行し、嘉永四年(一八五一)七月二十八日に川路聖謨の跡役として奈良奉行と転じ、同年十月十五日奈良へ赴任している。そして嘉永五年(一八五二)十月八日再び川路の跡役として大坂町奉行へと転じ、安政四年(一八五七)二月二十四日小普請奉行へと転じるまで大坂の町の治世を行った。その後、安政の大獄に連座して安政六年(一八五九)二月二日、御役御免となり牧野康哉

邸へ差し控えを命じられた。ただし十ヶ月後の十二月二七日には安藤信正邸にて小普請入りが申し渡され赦免された。文久二年（一八六二）七月六日には徒組に入り、同年十月十日作事奉行へと昇進、翌三年（一八六三）四月十六日には北町奉行、七日後の二十三日には西丸留守居となるが、四ヶ月後の八月二日南町奉行へとなり、元治元年（一八六四）五月二五日に外国奉行を兼帯し、同年六月二九日には正式に外国奉行となり、一ヶ月後七月二五日に再び御役御免となった（東京大学史料編纂所編『柳宮補任』二〇六（東京大学出版会、一九六三）六五年、『江戸幕臣人名事典』第二巻（新人物往来社、一九八九年）、日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、一九八一年）、竹内誠他編『徳川幕臣人名辞典』（東京堂出版、二〇一〇年）。

- (8) 川田貞夫『川路聖謨』（吉川弘文館、一九九七年）、一七二頁。

- (9) 『幕末外国関係文書』第四巻（東京帝国大学文科大学史料編纂掛、一九二二年）一二七～一二八頁。

- (10) 『幕末外国関係文書』第四巻、一二八～一二九頁。

- (11) 『幕末外国関係文書』第四巻、三二七～三二八頁。

- (12) 『幕末外国関係文書』第五巻（東京帝国大学文科大学史料編纂掛、一九一六年）、二〇四頁。

- (13) 『常陸土浦土屋家文書』（国文学研究資料館史料館所蔵）二九D一七〇九。「大日本維新史料稿本」。『幕末外国関係文書』第五巻、三一九～三四三頁。いずれも同様の文面であるが、差出が大坂城代である土屋寅直である。

め、「土屋家文書」を中心に使用する。「大日本維新史料稿本」は東大史料編纂所データベースでウェブ公開されているものを使用した。ここに所載されているのは水戸徳川家に残されていたものであり、寅直と斉昭が従兄弟であったために水戸家に大坂の情報が流されていたと考えられる。

- (14) 『幕末外国関係文書』第五巻、三九一頁。

- (15) 『幕末外国関係文書』第五巻、三九二～三九五頁。

- (16) 『幕末外国関係文書』第五巻、四〇〇～四一四頁。

- (17) 『幕末外国関係文書』第七巻（東京帝国大学文科大学史料編纂掛一九一五年）、二六三～二六五頁。

- (18) 『幕末外国関係文書』第七巻、四六二～四六五頁。

- (19) 『幕末外国関係文書』第七巻、六一七～六一八頁。

- (20) 『幕末外国関係文書』第七巻、六二六～六二七頁。

- (21) 『幕末外国関係文書』第八巻（東京帝国大学文科大学史料編纂掛、一九一六年）、一三～一四頁。

- (22) 『土屋家文書』三六D一四九（此度当地近海江魯西亜船渡来二付警衛向之儀存寄書控）。

- (23) 土屋の父彦直は水戸治保の実子であり、土屋家の養世子として家を継いでいる。水戸家は治保の子治紀、孫斉脩と続き、斉脩には子どもがいなかったため、実弟、すなわち治保の実孫の斉昭が家督を継いだ。つまり寅直と斉昭は実の従兄弟である。

- (24) 『幕末外国関係文書』第八巻、八八～九一頁。

- (25) 『幕末外国関係文書』第八巻、九二～九五頁。

- (26) 『幕末外国関係文書』第八巻、二一五～二一六頁。

- (27) 『幕末外国関係文書』第八巻、二一七頁。
- (28) 『幕末外国関係文書』第八巻、二一八～二三頁。
- (29) 『土屋家文書』二九D―一三四四 大坂両川口其外御台場目録見案。これに朱書がなされ、訂正された上で二九D―一三四五 大坂両川口其外目録見書が提出されている。
- (30) 『土屋家文書』二九D―七二七 大坂両川口其外警衛向取調書。
- (31) 『土屋家文書』二九D―七二六 町奉行差出候両川口其外警衛向取調書江及答候書取写。
- (32) 『土屋家文書』二九D―七一八。
- (33) 『大日本維新史料稿本』安政二年九月十三日条。
- (34) 『土屋家文書』二九D―七一九 大坂近海防禦之儀場所見置之上取調候趣申上候書付写。この写しには朱書や付箋が多く、大坂町奉行のもとでかなりの訂正がなされたものと考えられる。その訂正後の二九D―七二〇と整理されて残っている。二九D―七一九の川路の見書は二通分あり、さらに安政四年で実際に台場建設に伴っての川路の達しもつけられている。
- (35) 『土屋家文書』二九D―七一五 町奉行差出候大坂両川口其外警衛向取調答書。
- (36) 『土屋家文書』三六D―五〇 (大坂表近海御警衛向二付言上書取)。
- (37) 『幕末外国関係文書』第十四巻 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二二年、一五六～一五七頁)。
- (38) 『幕末外国関係文書』第十四巻、四三二～四三三頁。
- (39) 『大日本維新史料稿本』安政三年七月十八日条。『幕末外国関係文書』第十四巻にも同一のものが収録されている (四三四～四三九頁)。
- (40) 『幕末外国関係文書』第十四巻、六三六～六三八頁。
- (41) 『幕末外国関係文書』第十四巻、六三八～六三九頁。
- (42) 『大日本維新史料稿本』安政三年九月二八日条。
- (43) 曾根原理『神君家康の誕生―東照宮と権現様―』(吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (44) 『土屋家文書』二九D―七二一 木津川口安治川海口御台場模様替之儀二付伺書類写。
- (45) 『柳宮補任』五、四九～五〇頁。
- (46) 『幕末外国関係文書』第十五巻 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二二年、八一六～八一九頁)。
- (47) 『幕末外国関係文書』第十七巻 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二三年、八四三～八四四頁)。
- (48) 『幕末外国関係文書』第十九巻 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二八年、三一八～三二〇頁)。
- (49) 『幕末外国関係文書』第十九巻、三二〇～三二五頁。
- (50) 『幕末外国関係文書』第二〇巻 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九三〇年、五一七～五一二頁)。
- (51) 細川斉護は安政三年十二月十八日に「別段之思召」により中将に任じられている。同時に蜂須賀斉裕は同様の理由で正四位下に昇っている。これらはいずれも家斉との縁故によるものと考えるのが妥当であろう。
- (52) 『幕末外国関係文書』第二一卷 (東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九三二年、七〇～七三頁)。